

寄稿

過疎地の救世主： 「おてつたび」が開く 人手不足解消と 関係人口の新しい扉



富安 寛樹 (とみやす ひろき)
株WFPダチョウファーム農場長

1988年神奈川県生まれ。4年前から北海道平取町に移住して、WFPダチョウファームで大規模農業をスタート。

1 北海道での農業挑戦：初心者からの大規模農業

初めまして！北海道平取町で農業をしているWFPダチョウファームの富安です。



WFPダチョウファームは、北海道平取町で4年前から活動を続ける農場です！起源は岡山県で耕作放棄地の棚田を再生するプロジェクトからスタートしています。移住者とともに、地元の協力を得ながら農業に取り組んできました。



この経験や繋がり^{つな}を背景に、私たちは北海道での大規模農業に挑戦を始めました。私たちの経験は小規模な棚田の農業に限られていたため、大規模農業は未知の領域。初めは分からないことだらけで多くの困難に直面しましたが、多くの地域からのサポートを受けて、農業技術を学び成長してきました。



その中でブロッコリー栽培にもチャレンジをしながら、収穫期の人手不足が大きな課題として浮上してきました。近隣のブロッコリー農家も同じ収穫人員の課題という問題を持っており、収穫をどう乗り越えるかが新たな課題として私たちの前に立ちのびました。

2 予期せぬ人手不足：コロナ禍と外国人労働者の問題

私たちWFPダチョウファームは、畑作業や収穫などの多くのタスクをこなすために、海外からのメンバーも大切に受け入れています。



特にバングラデシュからのメンバーは、信頼のおけるコアメンバーとして一緒に働いています。2021年、既に在籍している5人のバングラデシュ人の他に、新たに5人を迎えて、合計10人でブロッコリー収穫のシーズンを迎えるはずでした。



ところが、その計画が頓挫してしまいます。まず、3人が突然辞めてしまったのです。そしてさらに厄介なことに、新型コロナウイルスの影響で、来日を予定していた新しいメンバーたちも来日できなくなってしまったのです。これにより、10人体制で収穫を行えるはずが、最終的にはわずか2人しかいないという、まさに絶望的な状況に見舞われました。

ブロッコリーの収穫は7月後半からと迫っていましたが、6月に入っても新たなメンバーの到着は絶望的。ブロッコリー畑は順調に成長していたものの、収穫を手伝ってくれる人がいないというのは、言葉では表せないほどの焦りを感じました。畑のある平取町豊糠^{とよぬか}は過疎地で、近隣から人を集めることも大変です。



しかし、収穫まであと1カ月。この短い時間を使って、どうにか人手を確保する必要がありました。結果として、私たちは家族や友人、そして知り合いからの紹介などで、日本国内から30、40名の方々に協力を仰ぐこととなりました。

また、この時期に新たに試みた手段として「おてつたび」というサービスを利用しました。私たちはこのサービスからも助っ人を確保することができました。

3 都市と地方を結ぶマッチング「おてつたび」

「おてつたび」は、旅をしながら稼ぎたい人と短期的な人手不足の地域事業者を結びつけるサービスです。リゾートバイトと似ていますが、特別な地域と行く人の関係性を重視しているのが特徴です。

WFPダチョウファームでは、このサービスを試し6月から募集を開始し、8月後半に受け入れを始めました。2022年は、68名の「おてつたび」メンバーが助けに駆けつけ、32haのブロッコリー収穫の大部分を彼らと行いました。平取町豊糠のこの僻地^{へきち}で、こんなに多くの人を受け入れられたのは驚きでした。



参加者の背景は多岐にわたり、大学生、フリーター、定年退職者、自営業者、休暇中のサラリーマンなど、さまざまな背景の人々が集まりました。主な参加動機として以下の4つが挙げられます。

- ① 北海道を訪れる手段として：特に夏休み中の学生が、旅行資金を稼ぎながら北海道を訪れる手段として「おてつたび」を利用。
- ② 農業への興味：農業に興味を持つ者や将来の就農を考える者が、体験の一環として参加。
- ③ 旅の途中でのワンクッション：日本や北海道を旅行中の者が、途中で働きながら宿泊の場所を確保する手段として利用。
- ④ 新しいチャレンジ：自分の次のステップを模索中の者や、新しい体験を求める者が参加。

「おてつたび」はさまざまなニーズを持つ人々と地域事業者を繋ぐ役割を果たし、両者にとって有益なサービスとなっていることを実感しました。

4 人手不足から生まれる関係人口づくりの要点

学生の頃、地域との接点が少なかった私は、地域と人との気軽な繋がりに魅力を感じていました。観光地に一度訪れた人が、再びその地を訪れる確率は非常に低く、観光地への再訪を動機づけるには強い理由が必要となります。

そこで「おてつたび」というサービスは、地域と訪問者との関係性を一回限りでは終わらせず、再訪したくなるような体験を提供することを目指しています。そのための重要な要素として、「期待値や想像を超える体験」を提供することが考えられます。情報が手軽に得られる現代では、通常の観光では期待を超える体験が難しくなってきました。

「おてつたび」を通じて再訪したくなる要素としては、新しい人とのコミュニケーション、仕事の達成感、非日常の生活体験、そして個々の興味や方向性を追求することなどが挙げられます。しかし、これらの体験は事前の情報では分からず、実際に訪れて体験することで初めて理解できるものです。

「おてつたび」の旅は単なる観光ではなく、地域と深く関わる旅です。その結果、受け入れ側と訪問側双方の協力と理解により、再訪したいと感じる体験が生まれます。

このような体験を増やす「おてつたび」は、新しい観光の流れがあると感じます。私たちの活動する平取町豊糠という僻地であっても、たくさんの人が訪れて農繁期を乗り切ることができました。まだまだどこそこ？という地方にも人が訪れて、過疎地にも可能性はあるのだと思えた「おてつたび」の受け入れ体験でした。

